

平成 22 年 5 月 19 日現在

研究種目：若手研究(B)  
研究期間：2007～2010  
課題番号：19730556  
研究課題名（和文） 日本の聴覚障害教育の制度的・方法的整備とドイツ情報の影響に関する比較教育学的研究  
研究課題名（英文） Influence of German Information on Educational System and Method for the Hearing Impaired in Pre-war Japan  
研究代表者 佐々木 順二 (SASAKI JUNJI)  
聖徳大学・児童学部・講師  
研究者番号：20375447

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：聴覚障害、聾啞教育、口話法、聴力検査、耳鼻咽喉科学、教師教育、ドイツ、歴史

## 1. 研究計画の概要

本研究は、日本の聴覚障害教育が制度的・方法的に整備される過程で、その手本となった先進国の一つであるドイツからの情報がどのように摂取され、日本の聴覚障害教育の制度的・方法的整備にいかなる影響を与えたのかを究明することを目的とする。具体的には、次の手順をとる。

(1) 明治期から昭和戦前期を対象として、ドイツ渡航を経験した聴覚障害教育の関係者が残した足跡を整理し、ドイツから紹介された情報が日本の聴覚障害教育の制度的・方法的整備にどのように関係していったのかを明らかにする。

(2) 戦後期については、アメリカ教育使節団からのアメリカ情報の流入により、ドイツ的要素がどのように変容したのかを 1960 年代までを区切りとして明らかにしていく。

## 2. 研究の進捗状況

(1) 日本の聴覚障害教育における耳鼻咽喉科学の役割の分析

耳鼻咽喉科学は、明治期以降にドイツを主要な留学先として飛躍的に発展し、日本の聴覚障害教育の方法的整備にも影響があったと考えられるため、日本の耳鼻咽喉科学に関する文献研究をおこなってきた。

とくに事例として、日本の耳鼻咽喉科学の草創期に開設された九州帝国大学医学部耳鼻咽喉科学教室を取り上げ、同教室が、戦前期の聾啞教育の方法的整備に果たした役割を分析した。

同教室の役割は、①「無響室」「声音言語

障害治療部」等の設置による聾啞や残聴利用についての基礎的・臨床的研究の促進、②臨床・研究上の知見に基づく、近隣の福岡盲啞学校の口話教育・残聴利用の教育との連携、③聾啞教育関係者への日本初の検査設備・機器の紹介という三点であった。一方、未解明な課題として、当時の連続音叉やオージオメータを用いた検査がどの程度の判定力をもったのか、聾啞児の聴力評価が教育方法上の開発や、別種の学校・学級の設置といった制度上の整備とどう関係したのか等が挙げられる。

(2) ドイツでの現地研究者からの助言指導と史資料収集

研究期間 2 年目に、ドイツ共和国バイエルン州ミュンヘン、3 年目に、同市およびザクセン州ライプツィヒを訪問した。

ミュンヘンのルードヴィッヒ・マクシミリアン大学では、同大教授の研究助言指導の下、史資料の調査をおこない、同大学が、残存聴力を活かした教育の拠点でもあったこと、本邦初の大学耳鼻咽喉科学講座の教授となった岡田和一郎が学んだ足跡があることを確認できた。

一方、ドイツ口話法の父であるサミュエル・ハイニッケの創設したライプツィヒ聾学校の聴覚言語障害文庫では、20 世紀初頭の難聴児教育に関する資料を収集するとともに、今後、ドイツの聴覚障害教育の歴史的研究を深めていく上で有用となる史資料の所蔵状況の把握、史資料調査のキーパーソンとなりうる人との面談による情報収集を行った。

### 3. 現在までの達成度

#### ③やや遅れている。

理由としては、以下の三点が考えられる。

第一は、所属機関における教育業務（講義、演習、実習指導、学生生活指導等）との両立の問題である。

第二は、研究分担者にもなっている、科研費による他の研究プロジェクトとの両立の問題があげられる。

第三は、研究課題を達成するために設定した研究内容・計画の範囲の問題が挙げられる。

### 4. 今後の研究の推進方策

研究課題を十分に追進する上で、最も解決しなければならない点は、日本の聴覚障害教育の方法上の整備だけでなく、制度上の整備の観点から、ドイツ情報の影響を分析することである。また方法上の整備についても、耳鼻咽喉科学の領域について部分的に分析が進んだに過ぎず、肝心の聾啞教育の領域でのドイツ情報の影響にまでは踏み込めていない。

したがって、今後の研究の推進方策として、聾啞教育領域の史資料の分析に重点を移しつつ、日本の聴覚障害教育の方法上、制度上の範型がどのように形作られたのかを、改めて分析する必要がある。教育方法については言語指導理論、教育対象の把握の仕方（聾啞児／難聴児）、教育制度については学校・学級の設置方法、教師教育の在り方から明らかにしていく。そして、この範型の確立において、明治期以来のドイツから導入された情報がいかなる影響を与えたのかを総合的に分析する。

研究が「やや遅れている」現状を解決する上で不可欠なことは、研究時間の確保と作業効率の向上である。

研究業務と教育業務とを両立させるために、空き時間を有効活用するなどを、さらに意識していくことはもちろんのことである。また、他の研究プロジェクトとの両立については、研究作業が重なる部分などをよく見極め、効率的・効果的な作業をしていきたい。

最後に、現状から考え、少しでも研究課題を達成するために、研究内容・計画の一部を変更したい。すなわち、分析対象とする時期を、明治期から戦後期 1960 年代までとしたが、上述した問題をクリアするために、昭和戦前期を分析対象の終期としたい。このように変更することで、聾啞教育の方法と制度、耳鼻咽喉科学、ドイツ情報のそれぞれの関係の分析を深めていく所存である。

### 5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

佐々木 順二（2010）明治末期から昭和戦前期の耳鼻咽喉科医師による聾啞教育への関与—九州帝国大学医学部耳鼻咽喉科学教室を中心に—。障害科学研究，第 34 巻，pp.1-13。（査読有り）

佐々木 順二（2009）日本の特別支援教育の現況と課題—長期欠席児童および要支援・要保護児童を中心に—。現場特殊教育（韓国国立特殊教育院），第 16 巻 4 号，pp.62-65。（査読無し）

〔学会発表〕（計 1 件）

佐々木 順二（2008）明治末期以降の聾啞教育の方法的整備と耳鼻咽喉科学—九州帝国大学医学部耳鼻咽喉科学教室を中心に—。ろう教育科学会第 50 回大会，2008 年 8 月 3 日，大阪教育大学柏原キャンパス。

〔図書〕（計 1 件）

佐々木 順二（2009）日本の特殊教育制度。筑波大学障害科学系（責任編集）／安藤隆男・中村満紀男（編著），特別支援教育を創造するための教育学。明石書店，総頁数 428 頁，担当箇所 pp. 57-70。